九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

インドネシア・バリ島の農村調査から : 「慣習長」と「公務長」 : インドネシア・バリ島 : 村落における伝統的自治組織と近代的行政機構

松永, 和人
福岡大学

https://doi.org/10.15017/2231569

出版情報：九州人類学会報. 4, pp.7-13, 1976-12-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

インドネシア・バリ島の農村調査から

－「慣習長」と「公務長」－

〜インドネシア・バリ島一村落における伝統的自治組織と近代的行政機構〜

福岡大学　松　永　和　人

序

本文は、後にのべる３人による共同調査の結果の一部である。九州人類学研究会例会における私の発表の時期は、まだ共同研究に従事した３人による正式の印刷論文としての報告が行われていない段階であったために、主としてスライドによる現地の模様を紹介するにとどめ、システマティックな報告はさしひかえた。テーマも漠然と、「インドネシア・バリ島の農村調査から」としていたので、本文の主題もそのままにした。しかし、そのような報告の中にも一つの焦点はおいていたつもりである。それは、村落における伝統的な自治組織と近代的な行政機構とのかかわり合いに関することであった。というのは、調査地において、“Banjar”（英文では“hamlet”，我が国では「部落」とされている(1)）という基本的な地縁集団に、伝統的な自治組織の長としての「慣習長」（“Klian Adat”，“Klian”とは“chief”，“elder”，“Adat”とは“tradition”，“custom”の意(2)）がいるとともに、一方、同じ「部落」に近代的な行政機構の側の「公務長」（“Klian Dinas”，“Dinas”は“department”，“office”の意）がおかれ、その両者の関連に大きな関心をいだいたからである。目下、そのような関心から一つの報告論文（テーマ「『慣習長』と『公務長』〜インドネシア・バリ島一村落における伝統的自治組織と近代的行政機構〜」）を執筆しているので、そのごくあらましを本文として記載しておく。

調査は、昭和４９年度文部省海外学術調査研究補助金による「東南アジア島嶼地域における比較民族学的研究」（研究代表者東京工業大学岩田慶治教授）のテーマの下に編成された３チーム（マレーシア班、フイリピン班、インドネシア班）の中の一班（インドネシア班）の共同調査として行われた。インドネシア班のメンバーは、東京大学吉田禎吾教授をリーダーとし、亜細亜大学間苧谷栄助教授と私の３人であった。調査地は、バリ島の中心都市デンパサール（Den Pasar）から南東約６キロの一村落である。期間は、昭和４９年９月１８日離日、翌５０年１月１５日帰国するまでの約４ケ月、その期間中、ジャカルタでの諸手続き、またバリ島へ飛んだ後の諸手続きのため、実際に調査を行いえた期間は約３ケ月であった。調査は、いろいろな事情から大体３人行動をともにする共同調査の形をとった。しかし、その中でも自ら関心の所在を異にし、私の関心は主として、以上にのべたような視点からする地縁集団の問題にあった。

1. 「部落」、「慣習村」、「行政村」

上述の研究課題についてのべる前に、まず「部落」、「慣習村」、「行政村」についてふれておかなければならない。というのは、この3者が村人に直接的にかかわる地縁（かつ行政的）集団であるからである。インドネシア共和国の一州をなすバリ島は、8つの県（Kabupaten）よりなるが、その県の下に郡（Kecamatan）、その郡の中に「行政村（“Desa”）」[3]ーその長を「プルブクル（“Perbekel”）」という――が存する。その「行政村」は、今世紀初頭、オランダの直接的影響がバリに及んだ後に地方の実情を無視しかなり恣意的に（というのは、いくつかの「部落」を集めて構成しているが、それ以前からの「慣習村」に必ずしも合致していない）設置されたのであって、その意味で、この「行政村」が「部落」、「慣習村」にくらべて村人にかかわる度合は比較的少いということができる。[4] 問題は、「部落」と「慣習村」との関係である。我々の調査地の場合、サヌール（Sanur）とインタラン（Intaran）という2つの「慣習村」が合体して「サヌール行政村」（Desa Sanur）を形成していたが、調査地の人々の社会生活をみるとき、やはりその「行政村」に直接的にかかわることは比較的少く、その社会生活の多くが「部落」と「慣習村」とに終始しているといっても決して過言ではなかった。そして、その両者の関係は、一言にしていえば、J.L. Swellengrebelがのべるように[5]、バリ文化に特徴的な方位観とも結びついて[6]、「『部落』が世俗的諸活動の中心であるのに対し、『慣習村』が宗教的なそれの中心をなす」ことによって、社会生活のいわば全一体をなしているのである。我々は、「サヌール慣習村」（Desa Adat Sanur）の中の「ブルアン部落」（Banjar Buruan）を調査地としてえらんだのであるが、その「ブルアン部落」と「サヌール慣習村」との関係も、基本的に前記Swellengrebelの指摘と同様であった。

ところで、バリ村落の構造分析に関して、ギアツ（Geertz, C.）は、7つの「社会組織の諸面（Planes of Social Organization）」の分析の必要を提唱している。[7] 彼のいう7つの「諸面」とは、[8] ①特定の寺院での礼拝の共同義務、②共同居住、③単一の水系にある水田の所有、④持って生まれた社会的地位（「カースト」）の共通性、⑤親族のつながり、⑥「任意」組織のメンバーシップを共にすること、⑦単一の政府行政官に法的に共通に服従すること、である。

まず第一の「特定の寺院……」とは、「プロ・カヤガン・ティゴ（Pura Kahyangan Tiga）」と総称される3つの寺、「草分け寺（Pura Puseh）」，「死者の霊のための寺（Pura Dalem）」、「神々の集会所としての寺（Pura Balai Agung）」の3寺であるが、その3寺は、「慣習村」を基本単位として設置されている。ここに、前にのべたような「慣習村」の基本的性格が示されている。

ギアツのいう第二の「共同居住」というのが、本文でとりあげる「部落」であるが、それはその伝統的な長としての「慣習長」の下、後にのべるような種々な機能を果し、顕著な社会的まとまりを示している。

第三の「単一の水系……」に関しては、「部落」、「慣習村」とは全く別個の組織として「スバック（Subak）」という水利組合が組織され、灌漑用水路の維持・管理などにかかわる共同労働は、

この水利組合を単位として行われている。ただし、収獲の際の相互扶助は、ここにのべる「部落」中心である。

第四の「生得的地位（カースト）」については、「ブラーフマナ（Brahmana）」、「サトリア（Satria）」、「ウエーシア（Wesia）」、「スードラ（Sudra）」の4カースト(9)が、我々の調査地の場合、戸数１１１の中、ブラーフマナ４８、サトリア６、ウエーシア０、スードラ５７、で、しかも、その中のサトリアの６戸は比較的最近の入村者（さらに、６戸中２戸が親族関係にある）で、従って、その基本的なカーストは、ブラーフマナとスードラであった。

第五の親族に関して、我々の調査地では「ソロハン（Sorohan）」、「リンティハン（Lintihan）」という親族集団（父系）がみられた。ともに、いうまでもなく「部落」、「慣習村」の地縁集団とは、原理的に無関係である。その両者は、ブラーフマナとスードラの両カーストによって親族組織上大きな違いがみられる。ブラーフマナ・カーストの場合、１０代以上をさかのぼって、祖先の個性が失われず、その系譜関係も明確で、従って、大規模な集団が形成されているのに対して、スードラ・カーストにおいては、３〜４代さかのぼると、祖霊の個性は失われる。このような違いに関連するのがギアツのいう「テクノニミー（Teknonymy）」である。その「テクノニミー」とは、親族呼称に関して、スードラ・カーストのみにみられ、子供（孫）が生まれると、父母（祖父母）の個々の名前を呼ぶのをやめ、「……の父（母）」、「……の祖父（母）」というように呼ぶ習慣である。このような習慣の故に、世代をさかのぼればさかのぼるほど、個々の祖先の認識はうすれ、従って、共通の祖先を中心とする大規模な集団は形成されがたい。一方、ブラーフマナ・カーストにおいては、そのようなことはなく、大規模な集団化がみられる。なお、「リンティハン」とは、各家族と「ソロハン」との中間に位置づけられる小規模の親族集団で、そのそれぞれの集団は「部落」にそれぞれ共通の祖先の霊をまつる祠をもち、その祠の祭祀をともにしている集団でありまた後述するように葬式を除く各種「通過儀礼」を行う基本単位でもある。

第六の「任意」組織とは、芸能など、ある特定の目的のために「任意」に組織された集団のことである。

第七の「単一の政府行政官に……服従する……」ということにおいては、近代的行政機構の末端としての「行政村」村長「プルブクル」とその下の「部落」における「公務長」とが問題とされる。このように、「部落」には、第二に関連してのべた「部落」の伝統的な長としての「慣習長」とここにのべる近代的な行政のラインにおける「公務長」の２者が並存しているが、関心の中心はその両者の関係である。

2. 「部落」の伝統的な長としての「慣習長」の機能

「部落」の伝統的な長としての「慣習長」の機能は、広範囲にわたっている。その主なものに限ってみても、彼はまず、自治組織の上での責任者である。彼の下、月１回、定期的に「部落」の公共の

建物である集会所（“Bale Banjar”）で、「部落」にかかわる諸事項が話し合われる。その諸事項とは、例えば「部落」の公共物（上述の集会所、「部落」共有の「ガメラン（Gamelan）」という楽器、炊事用具など）の修理、維持、管理に使われる各家から徴収する金額の決定、養子、新婚、入村者の「部落」のメンバーとしての承認、すなわち、「部落」のメンバーシップにかかわること、前記3寺および「部落」の寺（Pura Banjar）の祭りに関して、その仕事の分担、費用などの話し合い、「部落」のメンバーで「慣習法」に違反した者の処罰などなどである。寺の祭りで前にのべた「プロ・カヤガン・ティゴ」の3寺は、「慣習村」を基本単位として設置され、従って「慣習村」――その長としての「ブンデサ（Bendesa）」の直接的責任にかかわることではあるが、その「ブンデサ」は、各「部落」の長「慣習長」との相談の下に、その祭りを遂行している。そして、その費用の拠出、祭りの際の仕事の分担など、各「部落」毎に、その長としての「慣習長」の責任の下になされている。また、村人の行為を規制する「慣習法」も各「部落」毎でなく、基本的には「慣習村」を中心としてみられ、従ってその「慣習村」村長「ブンデサ」がそれを維持する上での責任者である。とともに、違反行為に対する処罰は、前述のように直接各「部落」の長としての「慣習長」の責任においてなされている。その限り「慣習長」の機能がそのような場面でも明確に認められる。

以上のほか、「慣習長」の重要な機能は農作業――とくに、収獲に際しての相互扶助にみられる。すでにのべたように、灌漑用水路の維持・管理は、「部落」、「慣習村」とは全く別の組織である水利組合（「スバック」）でなされているが、収獲は、「部落」を単位とした相互扶助（“Gotong-Royong”）として行われている。「慣習長」は、その相互扶助の組織、遂行上の責任者である。なお、彼の下で行われる相互扶助は、そのほか「通過儀礼」に関して、葬式の場合にもみられる。つまり「部落」の中で死者が出た場合、「慣習長」の責任・指揮の下に、「部落」内の相互扶助として葬式が行われるのである。その他の「通過儀礼」――例えば、生後3ヶ月目の儀礼、同6ヶ月目の儀礼、削歯の儀礼、初潮祝い、結婚式など――は、基本的に家族・親族（「リンティハン」）のかかわることと考えられている。なお、以上にのべた「部落」への拠出金、相互扶助を受ける権利、また、果す義務など、カーストに関係なく平等であった。

このように、「部落」の伝統的な長としての「慣習長」の機能は、自治組織、「部落」のメンバーシップに関すること、相互扶助、「慣習法」の維持、さらには、相続問題の裁定などにも及び、実に広範囲にわたっている。このような「慣習長」の下、「部落」はいちじるしい社会的まとまりを示しているといわなければならない。ところが、一方、そのような「部落」に近代的な行政機構のラインとして、「行政村」村長「プルブクル」に直属する「公務長」が配置されている。

3. 「公務長」の機能

「公務長」は制度上、伝統的な「慣習村」村長「ブンデサ」および各「部落」の「慣習長」とは、無関係に、「行政村」村長「プルブクル」に直属し、彼の指示の下に動くことを使命としている。その

ような「公務長」は、村（「行政村」）役場を通して、月3,750ルピア（約2,800円）の給料を政府から支給されている。（一方、「慣習長」には「部落」内からも何ら手当てにあたるものはない。）「公務長」の機能は、「行政村」村長「プルブクル」を通しての政府からの「部落」への伝達、一方「部落」についての各種報告、徴税などのほか、村役場、病院、学校などの公共施設の補繕、また、政府の役人が来る際の道路の補修・清掃など、「公務長」の直接的責任の下になされるものとされている。ところが、「部落」のレベルで前にのべた「慣習長」の機能とこの「公務長」の機能とを峻別することは事実上不可能である。というのは「公務長」は、その役割遂行上「慣習長」に相談し、その「慣習長」の承諾、あるいは指示の下に行っているといっても決して過言ではないほどであるからである。つまり、「行政村」村長のラインからくる各種指令が「部落」のレベルでは、制度的には全く無関係なその伝統的な長としての「慣習長」の機能の中にいわば「吸収」されているといっても決して間違いではないと思われるのである。

4. 「慣習長」と「公務長」との関係

では、どのような条件の下に、そのような現象がみられるのであろうか。それは、少くとも我々の調査地「ブルアン部落」についていえば、カーストの違いではなかろうかと考えられる。つまり「慣習長」がブラーフマナ・カーストの者であるのに対して、「公務長」はスードラ・カーストの出身である。

そのようなカーストの違いが、その両者の「部落」における位置づけを上下の関係とし、そのことが以上にみたような現象の原因ではなかろうかと思われるのである。我々がいくどかインタビューのために訪れた際にみられた「公務長」の「慣習長」に対する態度が極めて低姿勢であったことが印象として残っている。また、実際上「公務長」は彼の役割遂行上、ことごとくといっていいほど「慣習長」に相談し、彼のいわば指示を仰ぐということであった。つまり、このようにして「部落」内におけるその両者の立場は、制度的には全く別個でありながら、カーストの違いから上下の関係に位置づけられているということができる。そのために「公務長」の機能は「慣習長」のそれにいわば「吸収」されているといったような状態を呈していると考えられるのである。

ところで、そのような両者の関係は、今後どのように変化していくのであろうか。その点に関する予測をあえてのべておけば、それは「慣習長」の地位の相対的低下、一方、「公務長」の地位の相対的上昇をみるのではなかろうかということである。調査地は、今日、急速な社会変化に直面している。というのは、約１０年前からの当地に対する政府の観光地化政策によって、多くのホテル、バンガローがたちならび、それらの従業員が当地から採用されたため、農作業上の相互扶助の遂行が事実上困難なほど、農業人口の減少をもたらしている「部落」もあるくらいである。このことは、そのような相互扶助を組織する直接的責任者である「慣習長」の機能の弱化につながることである。とともに、「世俗化」が急速に進行するきざしもみられる。例えば、彼等の宗教生活においてトランスに入り、

祖霊と交流することはその一つの重要な側面であるが、「ガメラン（Gamelan）」という楽器による音楽は、トランスに入る際の重要な要素をなしている。そして、そのガメランは、通常「部落」によって所有され、チームが編成されている。ところが、一方、純粋に観光客対象のガメラン・チームが4年前から、同じ「部落」で編成されている例もみられたのである。この場合には、もちろんトランスに入ることはない。これはあくまで一例にしかすぎないが、このことにもうかがえるように、「世俗化」が、観光地化政策によって今後、急速に進むことが考えられる。今日、そのような「世俗化」が、前述の3寺の祭り、その責任者である「慣習村」村長と各「部落」の「慣習長」に直接的に影響を与えている面はまだみられない。しかし、今後やがては、「慣習村」村長と「慣習長」の機能の弱化に影響しないことはないであろう。

以上のほか、グレーダー（Grader,C.J.）がのべるように、[10]中央権力の「部落」への介入という事実も、その変化に関して極めて重要である。そのような中央権力の介入は、「部落」の自治組織の弱体化、従ってその長としての「慣習長」の機能の弱化、その地位の低下をもたらすことはいうまでもない。そしてまた、そのような中央権力の介入のルートが「行政村」村長「プルブクル」からそれに直属する「公務長」のラインであることは明らかで、そのような介入が「公務長」の「部落」における地位の上昇をもたらすであろうことも当然考えられるのである。

（註）

(1) そのそれぞれの一例をあげておけば、

Geertz,C., 1967.

宮本延人編, 1968.

なお、その「部落」より小さな地縁集団（例えば、我が国農村における「組」のような）は存在しなかった。

(2) なお、ここにいう「慣習長」を後にのべる「慣習村」村長と混同してはならない。というのは、「慣習村」（“Desa Adat”、“Desa”はムラの意）は、今世紀初頭、オランダの影響がバリ島に及んだ後に設置された「行政村」に対して、それ以前からのムラで、その長を「ブンデサ（Bendesa）」という。ここにいう「部落」の長は、いくたの文献では“Klian Banjar”、つまり「部落長」と記されているが、我々の調査地では“Klian Adat”とよんでいた。従って「慣習長」と訳さざるをえないが、その「慣習長」と「慣習村」村長とを混同してはならない。

(3) 註(2)にのべた「慣習村」が“Desa Adat”といわれるのに対して、ここにのべる「行政村」は、今日“Desa”とのみ称されている。

(4) ただし、村（「行政村」）役場は無論、学校など「行政村」を単位として設置され、その限り、「行政村」の社会的まとまりもみられる。

(5) Wertheim, W.F.(ed.), 1960, p.32

(6) 「部落」が“ kelod ”の方向（海の方、下の方、俗の方）、「慣習村」が“ kaja ”の方向（山の方、上の方、聖なる方）

(7) Geertz , C., 1959.

(8) 訳語は、間苧谷栄氏による（間苧谷栄、1975）。

(9) バリ島では、“ Brahmin ”を“ Brahmana” , “ Ksatriya ”を“ Satria ”、“ Vesiya ”を“ Wesia ”という。“ Sudra ”は同じ。

(10) van Baal,J.(ed.), 1969. p.168

参考・引用文献

Geertz,C., a) Form and Variation in Balinese Village Structure
American Anthropologist, Vol.61, 1959

b) Tihingan: A Balinese Village
in Koentjaraningrat (ed.),Villages in Indonesia
Cornell University Press, Ithaca, New York, 1967

間苧谷栄、バリ村落の基本構造
『アジア経済』第16巻第10号
東京・アジア経済研究所，1975

宮本延人編、バリ島の研究－第二次東南アジア稲作民族文化総合調査報告－
東京・東海大学出版会，1968

van Baal,J.,(ed.), Bali : Further Studies in Life, Thought, and Ritual
W. van Hoeve,The Hague, 1969

Wertheim,W.F.(ed.), Bali: Studies in Life,Thought, and Ritual
W. van Hoeve,The Hague and Bandung,1960